

8

税に関する作文

令和6年度 公益財団法人全国法人会総連合会長賞

「かわいそう」ではございません

福岡県立門司学園中学校 三年 小田 孝太郎

二〇二三年六月。我が家にショッキングな報告が舞い込んできた。祖父が運転免許認定講習で不合格となったのだ。理由は、認知能力検査だった。祖父は笑ってこう言った。「免許返納時期がきたと神様のお告げだよ。」と。しかし、家族の不安は的中した。数日後、祖父はアルツハイマー型認知症と診断された。

それから、祖父の生活スタイルは大きく変化した。車での外出がなくなり、人とのふれあいも一気に減るにともない認知症も進行していった。進行を遅らせる薬も飲んだが、地域包括支援センターの方とも相談して、小規模多機能型居宅介護を利用することとなった。様々な介護様式があるが、祖父が可能な限り自立した日常生活を送ることを望んだからだ。

しかし、小規模多機能型居宅介護は、通い宿泊、介護訪問と利用できるため、予想以上に高額な利用料金だった。家族一同不安な中、ケアマネさんの言葉で安堵に包まれた。一割の自己負担と、九割は社会福祉費、いわゆる税の恩恵を受けることができるということだ。「ありがたいよね。でも、孝太郎達が社会に出る頃は、今以上にこうした税金がお給料から控除されるから、かわいそうだね。」と母が口にした。

確かに、社会科の学習で益々少子高齢化が進み、約二十年後、高齢者一人を一、三人の働き手で支えることになるかと学んだ。しかし、本当に僕達は本当にかわいそうなのだろうか。

その後、前向きに施設に通い出した祖父に、「安心して充実したお世話を受けられるのは、税金の力もあるよね。でも、これから社会に出る僕達は、こうした税金が今より一層増額されるだろうからかわいそうと思う。」と尋ねた。すると祖父はこう口を開いた。「税というと、どうしても多くの人は取られているといった負のイメージがあるからね。『血税』という言葉もあるくらいだから。」と。祖父は、税金を納める立場になった際、『潔税』と捉えるようにしたい。それは清潔（クリーン）に税金を使って、みんなが有意義な生活を送ることができるなら潔く納めようと決めたからだそうだ。続けて祖父は、「ゆりかごから墓場までという言葉。これは、イギリスで一生福祉を充実させる政策をとった当時のスローガンだよ。日本も福祉がより充実するために自分ができることは。」と僕に尋ねた。充実した福祉のために、未来の僕にできること。納税者としての義務を果たすのはもちろん、税金を有効に活用できる人を選ぶ選挙に足を運ぶこと。十四歳の僕には、今はこれだけしか思い浮かばないが、将来、税金と真摯に向き合うと祖父と約束した。

日々祖父の認知症は進行し、いつか僕の顔も名前も忘れていくだろう。でも、まだまだ祖父には長生きして今を精一杯生きてほしい。

結びにあたりこう伝えたい。僕達は決して「かわいそう」ではございません。一人一人の税に対する意識で輝く未来が待っていると。

令和6年度 全国納税貯蓄組合連合会優秀賞

税金は我々の未来を照らす光

福岡教育大学附属小倉中学校 三年 龍 史 奈

昨年の夏、最愛の曾祖母は他界した。老衰による静かな旅立ちであった。悲しみは深くぽっかりと空いた心の穴は、時間が経ってもなかなか埋まりそうにない。しかし、その悲しみに加え、感謝の気持ちも同時に湧き上がってきた。それは、曾祖母が亡くなるまで、そして亡くなった後も税金という制度を通じて、我々家族を支え続けてくれたことへの感謝である。

曾祖母は、戦後まもなく生まれ、高度経済成長期を経験した。貧困から抜け出すため、懸命に働き、家族を養ってきた。しかし、高齢になってからは、持病を抱え、体の自由も奪われていった。歩くこともままならず、日常生活を送るのも困難になっていく中で、曾祖母はいつも笑顔を見せようとしていた。それは、我々家族への愛情と、自分たちの未来を信じる強い心の表れだったと考える。そんな曾祖母が安心して暮らせるように、我々家族は、介護サービスを利用する事にした。そこで役に立ったのが税金であった。介護保険制度は、税金によって支えられており、曾祖母は必要な介護サービスを経済的な負担が少なく受けることができたのである。

また、曾祖母が亡くなった後も、税金は我々の支えとなった。相続税は、遺産を受け継ぐ我々家族にとって大きな負担になる可能性があった。しかし、税制上の優遇措置によりその負担は軽減された。そのおかげで、我々は、経済的な不安を抱えることなく、曾祖母の残してくれた大切な思い出を大切に守ることができたのである。

税金はただお金を徴収するだけのものだと考えていた。しかし、曾祖母との別れを通して税金が社会全体を支え、個人の生活を守り未来への希望を繋ぐ大切な役割を担っている事を改めて実感した。また医療費や教育費の負担を軽減し高齢者や障害者の生活を支え、災害時の復興を支援するなど、我々の生活のあらゆる場面に関わっている。それはまるで社会全体を支える、大きな光のようなものである。税金の大切さを実感した今、税金を納める事は社会の一員としての「未来を担う我々自身への投資」だと認識した。税金でより良い社会を築くために一人ひとりが税金に関心を持ち続ける事が大切で、未来の世代が税金がもたらす恩恵とその大切さを理解するために我々が伝える事が責任と感じている。

曾祖母は、我々に多くの愛情と、人生の教訓を与えてくれた。その中でも特に印象に残っているのは「どんな時でも希望を捨てないで。」

という言葉である。税金はまさに我々が希望を捨てずに未来へ向かって進んでいくための光なのである。私は曾祖母の教えてくれたことを胸に税金について深く学び、社会の一員としての責任を果たし、未来を照らす光を、これからも強く輝かせ続けたいと思う。